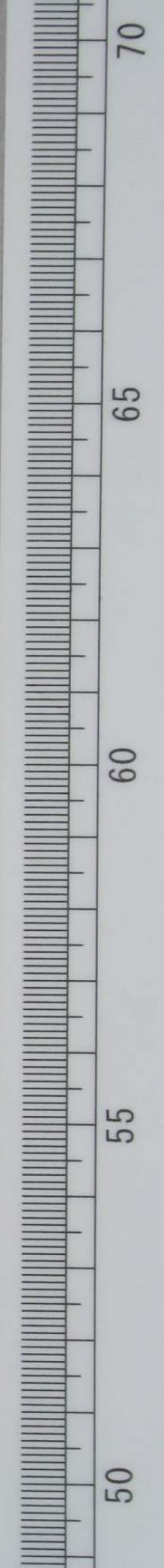


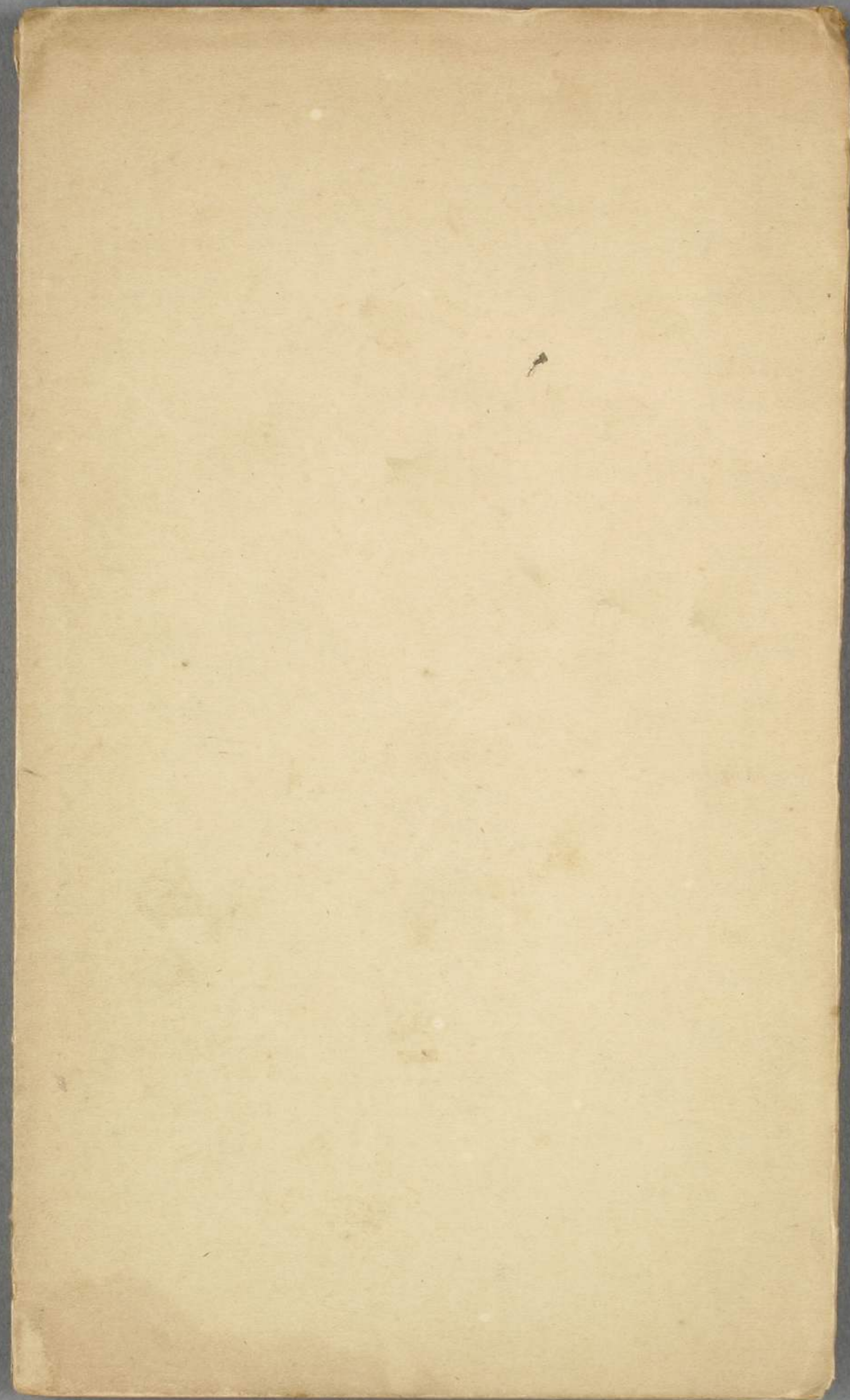
小詩國
薰園作



本間文庫
文庫 14
D 104











小詩國

金子薰園作

文章14
D104

あめつちはたゞわがために
ちひさなれ小さき榮はえは神の
たまもの

小詩國のはじめに

薫園

14
24

目次

花	瓶	一
歡	樂	七
素	香	一一
聖	壇	一七
紅	詩箋	二二
綠	衣	二八
森	かげ	三四
萩	小徑	三九

青	蘆	四五
落	木	五〇
白	菊	五五
冷	扉	六〇
おも	ひで	七〇
かへ	りみ	八二

附録
 小紅集

 武山英子作

小詩國

金子薫園

花瓶

瓶にさしてつくづく見れど紅梅は姫
ともならでさびしきよ春

くれなるの花にうもるゝ具珠島小さ
き女王に歌を教へし

月くらき瑞樹のかげにそとよれば衣
につめたき大理石像

紅き白きうすものつけし見らが笑み
と涼しうそよぐ朝風仙花

かへり咲きて瓶に志をれし白薔薇戀
の詩室はたゞ冷えまさる

菅笠に菜の花ゑがく興そゝる木曾の
春日は欄にながれて

うすぎぬに光つゝめる紅玉の花とら
まれてさむし寒牡丹

つめたきはわが天地と庭の隅に春を
すねたる水仙の花

詩に瘦せし三人をめぐる夏花の白き
にゆらぐ夕ぐれの香や(さる花園にて)

黙想の興ふけゆきて萩の雨芙蓉の雨
とわが耳に入る(ひと夜)

○
あけぼの、夏のゆめ野をあくがれし
わが詩の靈かつゆ草の花

梅が香に朝月うごく草川や水のけむ
りの夢とたゞよふ

卯の花のかきねぬらして雨すぎした
そがれをるを訪ふ人のこゑ

衣すれは定家や次にうかゞへることゝ
は新詩に興たかき宵(新派かるた會席上)

歡樂

秋風の秋を讀する野はくれて今歡樂
の月わきのぼる

妹のとすればつくる片頬笑みわかき
聖母の世を今見るか

わが歌に姫の千人が舞ひいで、春の御殿を現すれば足る

詩にはえむのぞみの花は野にみたり
歌の二人に月高う照れ

朝の欄にさゝやきてよる海鳥のつば
さにゆるゝ君が黒髪

われとわがよわき心を嘲りぬ牡丹く
づるゝともし火の前

玻璃の窓雪夜にあけてとひよりし鹿
に餌をやる人うつくしき

水仙の精よといひてきえゆきし夢の
香さむきあら衣のかげ

夕日あびて高くたちたる向日葵をた
だ何となくうち仰き見し

摘みてはすて棄てゝはつみて春の草
春の童子の手籠にみちぬ(新詩歌集の初めに)

素 香

寒燈はうすれてきえて水仙の花の香
さむう入夢に入る

山茶花に草堂の冬かざらせてにほひ
つめたき寒菊の花

低う曳く山羊の乳賣る笛の音やみど
り遠野の朝あけの空

何の野ぞたてるは君と二人なり今渾
沌の夜はあけむとす

その底にふかきさとしのこもるやと
ゆふべ泉に耳かたふけぬ

なにごとか夢に夢見てさめし夜をお
ぼつかなしや後夜の鐘鳴る

繪ぎぬのべてけさ黙想の興もあらむ
訪はですぎむか棟あふちちる門

逍遙のあした草野の露ふみて詩の興
何の花にあふる（郷にかへりし友に）

花かざしまねく白衣のかげ見えて島
の月夜をわが船おそき

奇しき香の春を薫じてあたゝかき君
が畫堂くわだうにたえし琴鳴る（某畫家の再婚せるに）

わが剪りてわがまゐらする水仙の花
の異香いかうに靈志れいしのばしむ（なき祖母の百ヶ日の朝）

白百合をつぼみながらにいけし夜の
寐ねざめに高き花のにほひや

春あさき京の御堂の梅の朝くる髪さ
むし經うつす人

花させば花は萎みぬ女樂師のかたみ
花がめ瑠璃色ふりぬ

詩の國の野のあけぼのにおひいでし
春のわか草夢あたゝかき(春風會諸子の詩集の初めに)

聖壇

石彫の天女母かと仰ぎ見ぬ聖壇くだ
る宵うす月夜

花野までとおぼるの月にいでしより
わが思ふ君はかへらずなりし

愁人の夢をめぐりて茅屋ちかうゑら
鶴啼くよ朝松の林

うるはしきかの彩雲のとばり透きて
ふと見し光わが詩にはえよ

ひまもりてゆふべの星もおちぬべく
葡萄の葉かげをぐらうなりぬ

銅瓶にうす紅椿いけて見ればわかや
ぎますよ白衣観音

花かげにわが吹く笛は春の曲美き音
と鳥のまたつどひよる

虫の音にきえしおもひのふとわきて
夕月野みち歌によるしき

わが眼^{まなこ}をひよとばかり黄金箭のみだ
れ眩うわが前に落つ

膠山絹海帖とて、今の世の名だゝる詩人
畫家より心こめし小品を乞ひえて、一卷
となせる書畫帖の後に

天^{あめ}の國のほひみなぎる繪の花野詩^し
歌^かの鳥のこゑほがらけき

不斷の音と詩歌はひゞき常^{とこ}花^{はな}と繪畫^{えいざ}
ははゆるわが春の國

紅詩箋

紅詩箋 ゆらめく見えて人はあらず蔽
ふわか葉の香に淡き縁

あたゝかう春日ながるゝ玻璃の扉に
今成りし繪のうつくしき榮はえ

ゆふ雲のくれなゐひたす靈の彩海あやの
女神が手は今君に(其畫伯の海を描ける傍にて)

かへり咲きの櫻ちひさき花瓶に小春
の日かげ斜にさしぬ

歌はむに美き名哈爾賓ハルビン乞ふべくは歌
の都と奏まきさせたまへ

迫りくるうす靄
薔薇のにほひあり君
が御手とる野の夕月夜

一とせを奏でふるしゝうたの樂よき
音生れむ新しき譜に(新年の作に)

うらゝけき春の日影にわすれたるむ
かしの榮華はえを呼ぶか鶯

うぐひすに紅梅の衣よそはせて今日
の日和に誰を訪はせむ

うつくしう紅葉ちりしく小笹道君に
遇はむの途ならなくに

ほがらほがら朝の鳥なく野に立ちて
詩に新しき光をえたり

ふと見しは理想の國の春の日にロ
レルかざすうす花少女

君が繪に靈えたまひし姫神のもろ手
の紅玉御子とや生れし(某畫家の双女兒を擧げしよろこびに)
香焚きて童子さふらふ天堂に君がみ
ふみを讀むと見てさめぬ(友の文集のはじめに)

山茶花にゆふ雨さむき小縁さきぬれ
てよりくる鳥もさびしや(なき祖母の上懐ひつゞける夕)

御叱りのみこゑはいまだきこえずや
二十年この子竟に榮なき(母の御墓にて)

緑衣

夏の皇子がみどりの御衣をよがせて
吹く笛の音か野の朝の聲
紅き花を君が戎衣の裏に秘めしをん
な心をあはれとおぼせ

小さかりしうつかりし君が世と
ねたうや思はむ露草の花(人のをさな兒を失へるに)
伊太利の精舎の壁にひんがしのわか
き詩人の筆ゆるしませ
花かざす島の少女が黒髪をましろき
衣をなふる春風

花草の夢の香おくるそよ風よ君低唱
の詩もつたへずや(人のもとに)

朝さむきおち葉の庭に何のはえぞ紅
の香たかき一輪うばら

ラファエルの聖像あかう扉とにさして
雪夜はえあり君が畫室アトリエ

わがおもひのせし小舟のまた消えて
詩歌しうかの海はとはにまばゆき

聖燭みかどにはゆる黄金の詩の冠冠ち小さう
てわれにふさはぬ(戯れに)

夢ながら甘き香かぎて笑む君にさし
やきて見よ木犀の花

初秋の詩興あらたなる夕月夜凭るに
おぼしま談るに君あり

詩の國の新年うたふあけぼのに希望のぞみ
の雲のわくやくれなる

封じたる春の歌反古封とけて新草も
えぬ紅き花さきぬ

君が胸に挿せる一輪これやこの花の
巴里の彩濃き花か(某畫家の歸朝を迎へて)

森かげ

森かげにあわたししげの落葉やつめ
たき肩にまたみだれくる

詩に會せず春の雨夜はくだちたり瓶
の丁子の香もくだちたり

世にすねて草の戸とさす角筥や君が
繪に似しあぢさゝる小道

光明の母へと一つ舟は見えて失意の
子らに岸はくれゆく

師もまさを祖母もまさを新年のさび
しき榮と歌よ幸あれ

ふくみては含めるまゝにさと吐きつ
病の味はあゝ苦きもの(病中)

夕日おびて銀杏ちりくる堂の縁わが
觀念の膝かろうなりぬ

あけぼのゝにほひ新なるわか葉かげ
小鳥が夢の香もこもるべし

血にあきし悪魔の異形野にみちて笑
ふをきけよ叫ぶをきけよ

樂堂に「寂寥」の曲まづみてはゆふべ
の葉窓にみだるゝ

なぐさめの音をもたらして惱みある
秋の小窓にさゝやくや何(友の詩集のはしに)

新年はましろき花とふる年のふりし
わが歌みなおほひぬる

朝雲に祈るわが歌ひとき高し君をほ
まれの旅にやるあした(久保醫學士の渡歐を送りて)

萩小徑

祖母君の一週忌に

萩小徑ふむに露けき朝あけや祖母の
墓に秋はめぐりぬ

「懷舊」はいかなる神の詩の巻か繰るに
あやしう胸ふたがるゝ

御墓^{はか}扉^びによりて仰げば夕づゝの愁ひ
にうるむわが眼ににぶき

一人ならぬ世ぞとおぼして笑みませ
る祖父^{おぢ}の君に秋なめぐりを

一とせのうれひ悲しみ語らむに汝は
やさしき露おびし萩

祖母君の新盆に

焚けどたけど芋殻のけぶり君をのせ
ず孫の二人に夜はたゞふけぬ

なき人の來ます宵よと門^{かど}にたてば裾
にまつはる水ひきの花

せめてこのおぼしま近く降りませ君

み迎ひの歌は成りにき

御駕みくまの音かと耳をかたぶけて萩のそ
よぎも胸やすからぬ

露にまめる燈籠の灯ひの影おちて待ち
しのぞみの光もきえぬ

○

—
42

萩芙蓉ゆふ日にやせし御墓道師が御
名呼ばゞいらへまさむか

—
43

あたゝかき潮とわきておもひでは師
がます國へあくがれしむる

まぼろしの影趁ひゆけば夕やみに萩
の花ちる師が御墓道

松もたてぞこの新年のこもり居よわ
かき生^{いのち}命の榮はうする、(師の喪中、新年を迎へて)

○

かなしみも愁ひも君がおん袖におほ
はれし世と覺^さりえし今

待ちわぶるわれには長き百年^{もとせ}か君が
かへさの道よふりたり(二首、師がいとせの御忌に)

青 蘆

青あしのそよぎに朝の思ひゆれて歌
を生みゆく行々^{よき}子のこゑ

ゑろがねの小さき聖^み像^がにやまとめき
て水仙いけぬクリスマス朝

いくさはてゝ煙さまよふ野の夕きら
めく星は何の啓さとし示ぞ

ほゝゑみてうまごの歌や待ちませる
御墓をめぐる連翹の花(祖母の御墓にて)

さすらひのわが世の旅の夕野みち袖
にちりくる花ほのじろき

夜の神の長うひきますうすぎぬにふ
れてこぼるゝしら玉椿

○

月の宴月なくふけてほのぐらき燭ともしを
のゝくゑら萩の雨

君が繪に入ればことごといのち生命えて歌

ふ蟲ありそよぐ草あり

吟せむに月なき宵のさびしさよ燭か
きたてゝ君が繪を見む(三首、月令會にて)

○

君がゆくへとひても見ましあけやら
ぬ磯の松原鶴のこゑする

うす月夜樂の音する花の野に白き被か
衣ぎのほの見えし夢

繪姿の見る見る生きてかぐはしき御
袖こぼるゝ天の花びら(薄氷遺稿の末なるなき君をし

のべる諸家の歌の後に)

落木

牛小屋に木の葉みだれて牛鳴きてミ
レが繪に似る夕げしきかな(雜司ヶ谷にて)

ひとり行く道はゆふ山風さむし小春
の野べは君と行く道

黙想の隠者もつひに山を出でよふゆ
べゆふべは人の戀しき

未枯やゆふ日さびたる墓原にほうけ
てたてり鶏頭の花

闇の手にふれてをのゝく野の鳥の夢
あたゝめむわが歌もがな

南歐の日かげあたゝかき野を戀ひて
西行く雲に思ひ寄せしか

春の日や森閑とせる大寺にをりをり
しきる遠音うぐひす

君が餘威ふくか朝かせ秋さびし胡地
の新墳松高う鳴る

道のべの野薔薇の花の香を嗅ぐにわ
が世の旅のさびしくもあらず

舟うけて笛ふきめぐる春の沿岸のさ
くらのをりをりちりぬ

仰ぎ見れどたゞよのつねの光のみ君
が慈眼に似し星もなき(なき師の御上をしのびて)

あたくかき祖父祖母のふところにて
十五年の夢やすかりし(小照の裏にかきし)
きゝと啼きて鴟飛びたちし晝の窓に
はらりはらりちる山茶花のはな

白菊

大輪の白きかざして舞はむ人ひとり
はほしきこの菊の宴

白菊の冠あらたなる七人に歌の世紀
はまた新なれ(二首、白菊會一週年の紀念に)

われらにと賜びし聖旨のおふけなや
天の香こもるしら菊の花(白菊會をむすびしとき)

菊の香に君が繪筆の香もそひてわが
繪姿のわれならぬ思

詩の國の春のはじめの朝ぼらけ召さ
れて君と行くか大宮

わが思ひおもひおもひの花と咲きて
君凱旋のあした飾れよ(女に代りて) 57

聖堂をめぐる白鳥しらとりましる羽はに御光お
ひて十字をめぐる

ゆふ日淡き秋の花野をさまよひて桔
梗ききょうにねむる蝶ちょうさましつる

清談の二人にちかき緑の上に秋を興
ずる月夜こほろぎ

あかあかと夕日をうけて兀山のひよ
ろひよる松の一もと高き

君が繪のあらばと思ふ檜木笠檜ひの香
高きもさびしからずや(半古ぬしの、木曾よりかへり

て、檜木笠を贈られたるに)

夜の神の御髪みかみすべりしかざしかや霜
にてぼれし山茶花のはな

鹿の角雨戸にふるゝ雨の夜を山下い
ほにひとり詩をおもふ

冷 扉

死の宮の冷扉あけます御手にすがり
母よと泣きて呼ぶすべ知らぬ

怪禽の叫びとだえし野の闇にわが寂
寥の歌かへりみる

ゆふ山に今木がらしの音たえてふも
との寺か鐘低う鳴る

森の神うた召すらしき夜のそよぎ二
たびきかばこたへましもの

詩に生きて詩に死なむ身をうれしと
もさびしとも観てわが世すゞさむ

誰が愁ひのせしかち葉か野の小徑一
足ごとにおもひ亂るゝ

萩の家先生の御遺骸の前に
通夜して

やすらかにねふる御相のあなたふと
わが師といはじ歌の御神よ

君が歌に生れしわれや野の小鳥なに
たのしまむ君が歌なしに
かへりみて歌を召すべき御供にと天
の花野にわれおぼすらむ
歌の母ふみの父ぞとあふぎ來し十と
せの光天あまにいなすか

師の御病あつかりしころ

朝霜をふみてとひ來し師の門や御咳
のこゑの今朝はきこえぬ
御寢いきに夜は沈みゆく病の間涙と
すればわが頬ながる

友の愛兒のいわけなきが、母に

わかれて程なくうせたるに

母にそひて董摘みつゝゆく稚兒の天
の花野にはや現すらむ

紅葉山人の訃に接したるころ

詩の帝きみをまねくとよそはせし秋
の御輦あゝうつくしき

さる國手を悼みて

弱き身の十年は君によりて來つ
のこるいくとせあゝ誰の手に

夢ならばさめよと思ふもうつゝなや
今鳴りわたる鐘のさやけき(葬儀の日、寺院にて)

祖母君を悲みて

沈む日の光さびたるまなざしやいま
はの君に掌を合させぬ

御手かけむ肩もなくして夕野路に召
すべきわれを尋ねまさずや

後のことおぼし惱むか夢のうちに見
えし御影の憂はしかりき

祖母君の初七日の朝ふと墓畔に
秋海棠の微風にそよぐを見て

わが書きし墓標の文字のにじみより
秋海棠は咲きかこぼれし

師が一めぐりの御忌にあたる
朝、御墓にて

柿葉にうすうのこれる初雪よあはれ
と賜びし御歌かたれな

なにならぬ物の響も御叱りのみこゑ
とのみにかしてまゐる

おもひで

こゝには、むねと、ふりし調のを收め
つ。さるは、過ぎしおもひでの、われに
はなつかしきふしおほくて。

わが名をば病の文字におもひいづと
いひしかの友今世にあらず

清水わく古井のあたりおもしろし清
しうつくし春のわか草

日あたりの縁にならべぬ鉢植のうる
しの紅葉しら菊の花

一もとの枯野の末の椎の木に小鳥む
れぬる霜白き朝

晝顔のうなだれてさく野の小道小道
うねうね君が家見えす

春の愁ひ秘めたる絃いのあやしくも君
がみ歌にふれてさゝ鳴る

ふたつ三つとびゆく鳥のかげ遠く夕
風わたるちはらかや原

江の北にあけの鐘鳴る志のゝめを落
ちくる雁のかげかすかなり

君ひとりまさぬばかりに都をばさび
しと思ひぬさくらさくころ

芭蕉葉にさはりし風の音たえてさび
し今宵は蟲の音もせぬ

朝顔のやつれてのこるやれ垣をふた
羽は鶏くゞりて出でぬ

うるはしうゆかしき笛の音をとめて
露の夜川をたゞ下りゆく

春さひき溪の清水に黒髪をあらへる
人のかげほのじろし

うすがすむ片瀬腰越前にして小春の
いそべたゞ繪をおもふ

輪かざりのゆがみなほせる朝の門京
の繪師より繪はがきつきぬ

姫君はかるたの會にいでまして金屏
にうつる梅の影淡し

うせし師の住ましゝあとにふといで
ゝ知らぬ門松禮してすぎぬ

蕎麥の花さきつゝきたる畑中をかた
りつゝ來る人まづ畫なり

よそながら人の柩を門に倚りて見お
くる夕秋の風さむし

富士見ゆる海べの宿に繪師となりて
今日も水繪の筆とりくらす

高樓に風ふきみちてさらしたる書の
卷々みなひるがへる

おもひねの夢にのみ見し君が宿を今
たづねつと思ひしも夢

朝餌まちて籠の金絲雀こゑたてぬ朝
窓うたに思ひ倦みをれば

白き紅き牡丹さきたる後庭の花のそ
よぎの朝めざましき

麥酒くみて君と蕎麥くふ竹の緑ゆふ
風たちて青葉みならせく

薔薇の香のたかきにまとひゆくりな
くさめし霎時は夢としもあらず

歌よみの禪師とふべく今宵また木ふ
かき山をみ寺のかたへ

紅梅の花ちりかゝる森かげのをぐら
き水に鷺鳥うかべり

神垣に梅さきみてるおぼろ夜を牛の
背の人おとよに似たり(菅公)

一むらの白き桃さく門をいでゝ坂路
おりくる人おぼえあり

梅さむき杉田の里のありあけに春の
潮のゆるうさしくる

丁子おほきうらの花園香にみちてぬ
るき夜風の袖にえならぬ

かへりみ

人よ、わがこゝろ弱きをゆるし
たまへ。こゝにも舊調のすてが
たきを收めつる。

灯ひともりし岡の小家のともすればか
へりみらるゝ夕月夜かな

春の夜を葡萄の酒の香に酔ひてわか
き繪ただくみ書を説きてやます

赤蜻蛉ゆふ日にむるゝ寺の門にやせ
し法師の落葉はく見ゆ

朝風にゆかたふかせてあけはなつ山
窓蟬の迷ひ入りたる

都いで、たゞ見るものは山と水興は
すゝみて歌のおくるゝ

南むきの茶室の前にひともの丁子
かをりて春の日ぬくき

岡の上に年の初日をわが待てばこゝ
にかしこに鶏のこゑ

黄なる菊白き菊もつ童子ふたり野べ
のさざりにうすれてきえぬ

枯蓮にうすれし夕日かげきえて水音
さむく鴨ふたつ飛ぶ

小春日を山おりくれば鴨ひななきてふも
との川にわたし舟ゆく

ふきあれしよべの西風をさまりてや
れし芭蕉に霜うすく見ゆ

鳥のかげ窓にうつろふ小春日を木の
實こぼるゝおとまづかなり

うねうねとめぐれる野徑みちたそがれて
夕月ほそしつゆ草の花

一むらの芙蓉の花に風見えて寺の朝
庭ひよ鳥のこゑ

露おもき秋海棠を眺めつゝよべ見し
夢のなごりをぞおもふ

秋風にふかれふかれてひとつ二つさ
きし朝顔花のちひさき

枕べのともし火きえて手さぐりに薬
のむ夜のさびしくもあるか

いくたびかつけて見たれどなき人の
形見の衣きぬの身にあはざりし

妹のいけし牡丹にくれなるの燭てり
はえて春の夜ふけぬ

三たびまで蓮さく池をめぐれども佛
にあはずありあけの月

野分やみて荒れに荒れたる花園の花
にさびしき秋の日の影

芙蓉剪る人のたもとの寒げなりあさ
露しげき庭の花畑

小紅集

武山英子作

ゆふげをへてゆふべ欄による雨あがり
青葉がくれの瀧の音たかき

花のころをかしこし母のおくつきに
櫛の枯葉みだれ亂れたり

鼓の音ちかくきこえて上根岸杉のあ
ら垣花ちりかゝる

色あせてはや萎れはてむ小草なればと、妹
のせちにいなめるを、強ひて抜きあつめた
る一束ふた束を、小紅集とおふせつ。今めき
て、あてに華やかならねど、あえかにやさし
き調のうれしくて。

蕪園

小紅集

武山英子

寵さめて凭るにさびしき朝の窓何の
傲りぞ緋牡丹の花

幣ぬきを手に雁を見おくる人わかしか加茂
のやしらの秋の夕ぐれ

朝の日のとゞかすなりし山の裾につ
めたげに咲く野菊二もと

そゝろにも母の御姿まのばれてわが
うつし繪のわれと戀しき

さくら木と彫りたる墓の苔の上に花
の香さむう紅流す雨(名妓さくら木の墓にて)

こぼれたる椿の花のとゞろきに殿の
ひゝなの冠こけたり

名に高きむすめとつぎて油屋の暖簾
さびしき春の雨かな

梅かをる古廟の丘のうす月夜驢馬に
またがる人の影あり

卯の花の雨にやつれし朝の窓寫し
したる御經うつさむ

眉白きおきなが磨く紅玉こぎよくに坐ま右みぎのつ
ばきに春の灯いはゆる

わかき御手に念珠ねんじゆくりつゝ後の御名
君唱へむに感あはひまささずや(母にわかれし人の許に)

うるはしき花環花環の色あせて小ちさ
き墓の名雨にやつれし

御佛にこよひ満願まんがんのいのりはてゝそ
ゝろうれしき望の月見る

よべの夢の跡をたどりて梅さける岡
にのぼればあけの鐘鳴る

はしちかく檜扇のかげほのめきぬ紅
梅殿の春の夜の月

女房の朝げはひするまる窓に紅梅の
かげうぐひすの影

萩すゝき桔梗かるかや藤袴みなたけ
のびてうらがれにけり(秋の末、百花園にて)

みあかしにみ油つぎて讀みさせる御
經また讀む御佛の前

見失ひぬ又見うしなひぬ百合の香の
高き園生のをさな人影(梶田ぬしのをさな君を悼みて)

年をろをわがあこがれし繪の人のす
みれとなりし春の夜の夢

菫もみぢ色にいでそめて竹垣のゆひ
めくるひぬ霜白き朝

はしちかく針の手とめて仰ぎ見ぬこ
の夕ぐれのはつ雁のこゑ

うぶすなの森の椎の實こぼれそめて
隣の稚^ち兒^ごの疎^そくなりぬる

新しきめをと棲みたる宿は荒れてさ
びしく立てり二もとの松

賜りし御題にえたるうたの興流るゝ
星にふとみだれたり

蓮池の浮葉のひまにかげ見えて七日
あまりの夏の月涼し

ものゝけの襲ひは夢か宿直する女御
のおとよの夜はふけにけり

蚊やり火のけふりにくもる行燈の火
影に白しふみを讀む人

見かへれば香の煙のほのかにて手む
けの花に風そよぐなり(母の御墓に詣で)

時めきしうたひめ老いてわび居する
垣根にさけり露草の花

几帳たれて中宮こもる里内裏もの
もはせの秋の雨ふる

みほとけの御像千體繪におして君が
後世祈むともし火の前

ひとゝせをぬし失ひし白後齒つけて
 歩むに足おもき秋(二首、祖母君の一めぐりの御忌に)

—をばり—

明治三十七年十一月七日發行
 明治三十八年六月一日四版
 明治三十七年十二月十日二版
 明治三十八年七月十六日五版
 明治三十八年六月十五日六版

第六版

著者 金子雄太郎

發行者 中根駒十郎

印刷者 藤澤外吉

東京市神田區仲

東京市神田區

東京市神田區

發行所

東京市神田區飯田町
 三丁目二十五番地

新潮社

電話(番町)二、二二三番
 振替(東京)九、六三九番

(錢五拾貳金價定)

金子薫園氏著 (最新刊)

和歌新辭典

總洋布函入上製
定價金六拾錢
郵送料金六錢

▲幾萬の歌語を網羅して之に精細なる註解を施し
▲歌語を列ねて一首となすべき方法を詳に説き
▲模範とすべき名家の作例を擧げて一々評釋せり

▲斯道無二の典範▼

(報知新聞評)其閑歴と地位とに於て新時代和歌の指導者たるに最も適する金子氏が一歳有餘の苦心に成れる者也。歌語を網羅して之に精細なる註解を加へ、歌語を列ねて一首となすべき方法を説き更に作例を擧げて評釋を施すなど用意飽く迄懇切、斯道無二の典範也

▲忠實なる辭書也▼

(毎日新聞評)從來此種のものに無いではないが多くは杜撰極るもの

で本書の如く忠實ではない。編纂にも新生面を開いて、一寸した註解でも中々面白く詩趣に満ちて居る。初學者の手を取るやうに極平易に分り易く説明して丁寧過ぎる位ぬだ。要するに忠實な辭書である。

▲短歌入門者の指針▼
(日本新聞評)編纂いかにも懇切に一に短歌入門者の指針たるを期せる用意は一瞥して知ることを得べし初學者一部を座右に置けば、縦横三十一字を列ぬるを得ん。

▲最も學び易い便宜▼

(早稲田文學評)作歌の上に最も新しい智識と最も學び易い便宜とを與へたもので、用語、引例、説明、註解等何れも當を得てゐる。引例だけ見ても優に現代和歌を知悉し得ることが出来る。一面現代名歌集の要もなしてゐる。體裁も至極よい。氣のきいた袖珍型で携帯に便である。

▲適當なる參考書▼

(文章世界評)切實に初心者參考に資すべく著はしたものである。四季、無季、人事等の各項に涉つて先づ類語の主として新らしきものを掲げ、それに解釋と用途とを附記してある外に、一々作例を新派の和歌中より擧げてある。この書の如きは、最も便利にして適當なる參考書と云ふべきである。

